

演 題 一 覧

- ・神経機能に関わる転写因子 NRSF/REST に結合する DNA センサー分子 Ifi203 の機能解析
鳴瀬 善久 (自然科学ユニット),
廣瀬 英司, 田中 雅樹, 森 望
- ・携帯端末を利用したアクティブラーニング
都築 英明 (医学教育研究センター),
梅田 雅宏, 鳴瀬 善久, 廣瀬 英司, 河合 裕子, 村瀬 智一
- ・Neocaridina sp. “Bee shrimp” の紋様形成に関する研究 (色素胞解析)
鳴瀬 善久 (自然科学ユニット),
猪 彩香, 阿部 佳怜, 内海 有彩, 廣瀬 英司, 都築 英明
- ・平成 28 年度 入学前教育の取り組み
都築 英明 (医学教育研究センター),
梅田 雅宏, 鳴瀬 善久, 廣瀬 英司, 河合 裕子, 村瀬 智一
- ・運動器再生における mTOR 分子経路に関する新規研究領域の可能性の検討
廣瀬 英司 (解剖学ユニット),
本田 修平, 鳴瀬 善久
- ・ラベンダーの香りが機械的痛覚閾値に及ぼす影響
定盛 展也 (鍼灸学部 4 年生 生理報学ユニット),
山中 一星, 岡田 薫
- ・胸腺皮質領域形成および皮質上皮細胞分化における LTβR の役割
糸井 マナミ (免疫・微生物学ユニット),
千葉 章太
- ・Foxn1 により調節される胸腺上皮細胞の分化及び機能に重要な分子の解析
千葉 章太 (免疫・微生物学ユニット),
糸井 マナミ
- ・家庭でのセルフケアが子どもの健康状態に及ぼす影響
加藤 雄士 (大学院修士 1 年生 臨床鍼灸学講座),
原 智美, 田口 玲奈, 北小路 博司
- ・膝蓋靭帯炎に対する鍼治療の効果～大腿部への刺鍼 (浅刺・深鍼) の有効性に関する RCT ～
井上 基浩 (臨床鍼灸学講座),
今枝 美和, 糸井 恵, 北小路 博司
- ・頸部神経根症に対する鍼治療の臨床効果—前向き症例集積研究—
今枝 美和 (臨床鍼灸学講座),
北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩
- ・肩こりに対する鍼の刺入深度の違いによる効果の相違—ランダム化比較試験—
大崎 彩加 (大学院修士 1 年生 臨床鍼灸学講座),
今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩
- ・学生における VDT 機器の利用実態と心身の自覚症状などに関するアンケート調査
鶴 浩幸 (保健・老年鍼灸学講座),
小糸 康治, 北小路 博司
- ・母指 CM 関節症に対する鍼治療—1 症例報告—
岸本 優介 (大学院修士 2 年生 臨床鍼灸学講座),
今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

- ・頸部・手部の鍼刺激が自覚的耳鳴に与える影響の基礎的研究
鶴 浩幸（保健・老年鍼灸学講座），
福田 晋平，江川 雅人
- ・腰部脊柱管狭窄症に対する一般的鍼治療と神経根鍼通電療法の併用効果—1 症例報告—
久保 湧奨（大学院修士 2 年生 臨床鍼灸学講座），
今枝 美和，北小路 博司，糸井 恵，井上 基浩
- ・嗅覚減退に対する鍼治療の 1 症例
鶴 浩幸（保健・老年鍼灸学講座）
- ・社会人野球選手における大会期間中のコンディション変化
吉田 行宏（保健・老年鍼灸学講座）
- ・表面筋電図，脳波およびクォータニオン値よりみたヒト上肢の筋力トレーニング評価システムに関する研究
赤澤 淳（基礎柔道整復学講座），
岡本 武昌
- ・A 看護大学生の学習方略と講義理解の認識および自己効力感との関係
宇城 靖子（成人・老年看護学講座），
山下 八重子，小倉 之子
- ・効果的な看護技術演習の検討
小倉 之子（成人・老年看護学講座）
- ・リカレント学習講座「質的研究の基礎」の臨床研究支援—臨床看護研究能力を高めるための内発的動機づけ—
宇城 靖子（成人・老年看護学講座），
仲口 路子
- ・大学入学後の学修に対する適応要因に関する研究①—適応の変化 1 年から 2 年生になって—
山下 八重子（母性・小児看護学講座），
松岡 みどり
- ・看護系大学生の精神的健康パターンと心理・ライフスタイルの関連性の研究
藤田 智恵子（成人・老年看護学講座），
今井 理香，原 久美子，松岡 みどり
- ・大学入学後の学修に対する適応要因の研究②—看護学部 10 期生と 11 期生のアンケート結果の比較—
山下 八重子（母性・小児看護学講座），
松岡 みどり
- ・美山町生きがい通所事業参加者に対するロコモティブシンドローム予防教育実施 1 年後の参加者の意識と実態について
村上 久恵（地域保健看護学講座），
佐藤 裕見子，田中 富美子，坂井 茂子，河原 照子，松岡 みどり
- ・老年看護学実習中に体験する学生の倫理的課題—教育的対応の検討—
栗山 真由美（成人・老年看護学講座），
上仲 久
- ・美山町生きがい通所事業参加者の認知症に関する意識と実態について
村上 久恵（地域保健看護学講座），
佐藤 裕見子，田中 富美子，坂井 茂子，河原 照子，松岡 みどり

※下線は，筆頭発表者を表す。

携帯端末を利用したアクティブラーニング

都築 英明, 梅田 雅宏, 鳴瀬 善久, 廣瀬 英司, 河合 裕子, 村瀬 智一

医学教育研究センター

本学の e-ラーニング環境としては, LMS として学修支援システム (ActiveAcademy), 主として ICT 関連教育に用いている moodle, そして学生との連絡を主な用途としている Gmail 及び GoogleSites などの GoogleApps がある. アクティブラーニングについては既に課題解決型学習, 体験学習, 調査学習, グループディスカッション, ディベート, グループワーク等が本学でも取り入れられている.

医療系の大学では記憶することが多いため, 学習を繰り返すことが大切であり, 自宅での予習, 復習, 小テストといった作業が必要である. このような学習支援には GoogleApps の機能が有効であることがわかった. 予習, 復習には GoogleSites を利用し, 小テストには GoogleForms が便利であった. 特に GoogleForms は授業における理解度の判定にリアルタイムに対応可能であった.

平成 28 年度 入学前教育の取り組み

都築 英明, 梅田 雅宏, 鳴瀬 善久, 廣瀬 英司, 河合 裕子, 村瀬 智一

医学教育研究センター

本学では入学前教育に平成 25 年度から取り組んでおり, 平成 27 年度からは入学前にキャンパスでの学習会を開催している. 平成 28 年度はこれまでの経験を生かして生物系の科目を中心とし, 学習習慣を維持させることに主眼を置き, キャンパスでの学習会のほか, GoogleSites と GoogleForms による専用ホームページを開設した. ホームページには小テストなどの学習課題のほか事務的な連絡事項も掲載した. これにより入学生それぞれの学習状況をリアルタイムに把握することができ, 必要に応じて家庭や出身校を通じて学習支援を依頼することにより, 学習意欲の維持につなげることができた.

入学前教育で得られたデータは初年次教育につなげることで, ドロップアウトの防止や教育プログラムの編成に有効活用されることが期待される.

ラベンダーの香りが機械痛覚閾値に及ぼす影響

定盛 展也, 山中 一星, 岡田 薫

生理学教室

【目的】近年、アロマセラピーはホスピスや看護領域において癌患者への疼痛管理のアプローチとして広く用いられるようになってきているが、その詳細については不明な点が多い。本研究では、鎮痛効果があるとされるラベンダーの香り刺激による機械的痛覚閾値に対する影響を調べた。

【方法】同意の得られた健康成人 10 名を対象とした。機械痛覚閾値は、被験者の左前腕内側中央 2cm×2cm 領域内の 5 箇所測定した。ラベンダーオイルは、超音波式のディフューザーで気化させ被験者に吸引させた。

【結果】ラベンダーの香りを嗅がせなかったコントロール群では、pre, after とも数値は安定しており、アロマ群ではやや after の値が上昇したものの、群間比較では有意な差は確認されなかった。ラベンダーの香りに対する被験者の好みで分けて変化率を比較したところ、好きと答えたグループと普通と答えたグループのあいだに有意な差が認められた。

【考察】嗅覚情報は脳辺縁系に情報が送られることから、快や不快の情動や本能行動に関与すると考えられている。今回、ラベンダーの香り刺激によってアロマ群とコントロール群で有意差が出なかった理由のひとつに、ラベンダーの香りの好きか嫌いが関係した可能性があることが示唆された。

家庭でのセルフケアが子どもの健康状態に及ぼす影響

加藤 雄士, 曾山 成美, 原 智美, 田口 玲奈, 北小路 博司

明治国際医療大学鍼灸学部臨床鍼灸学講座

【目的】家庭でのセルフケアが、子どもの健康状態に及ぼす影響を調査した。

【方法】研究の同意が得られた保育園に登園する 23 組の親子を、セルフケア介入群 12 組と非介入群 11 組にわけ、セルフケアが子どもの健康状態に及ぼす影響を調査した。介入群では、研究開始時に母親に子どもの手足・胸腹部・背部など全身への接触刺激（ローラー鍼で 5 分間）を週に 2 回、4 週間行うように指導した。子どもの健康状態の評価には、独自に作成した健康チェック表と、子どもの睡眠・かんむしなどの程度を評価できる「小児はり問診票」を用い、研究開始時（前）と介入 4 週間後（後）で比較した。

【結果】介入群および非介入群の子どもの平均月齢、男女比、母親の平均年齢に差はなかった。健康チェック表による子どもの健康状態に大きな差はなかった。4 週間の健康チェック表による子どもの健康状態は、両群で差はなかった（介入群：26.3 点、非介入群：25.8 点）。小児はり問診票では、セルフケア介入群で叩く、噛みつく・物をなげつけるなどのかんむしと食欲不振の項目において、有意な低下がみられた（ $p < 0.001$, $p < 0.05$ ）。一方、睡眠や便秘、アレルギーなど他の項目については著明な変化はみられなかった。

【考察および結語】今回の研究対象となった乳幼児は、比較的、健康状態が良好であったため、健康チェック表および小児はり問診票では、健康面での著明な変化を捉えることができなかったと考えられた。しかし、叩く、噛みつく・物をなげつけるなどのかんむし症状に対しては、家庭でのセルフケアが有効である可能性が考えられた。

膝蓋靭帯炎に対する鍼治療の効果 ～大腿部への刺鍼（浅刺・深鍼）の有効性に関する RCT ～

井上 基浩, 今枝 美和, 糸井 恵, 北小路 博司

鍼灸学部臨床鍼灸学講座

【目的】膝蓋靭帯炎に対して、基本的な刺鍼を膝蓋靭帯圧痛部とし、加えて行った大腿部への浅刺と深刺の効果の差をランダム化比較試験（RCT）により検討した。

【方法】膝蓋靭帯炎と診断された患者 8 例 13 肢とした。大腿部浅刺群（浅刺群：4 例 7 肢）、大腿部深刺群（深刺群：4 例 6 肢）に割り付けた。治療は両群ともに膝蓋靭帯圧痛部 1 箇所（深刺群：7mm）し、浅刺群は大腿前面部、鼠径部（大腿神経走行部）に浅刺（深刺群：5mm）した。深刺群は、浅刺群と同一部位に深刺（1～3cm）を行った。なお、深刺群も治療 4 回目までは浅刺とし、5 回目以降を深刺とした。治療は合計で 9 回（1 回／週）行った。Visual Analogue Scale（VAS）にて評価した。

【結果】初回から 5 回目治療前と 5 回目治療前から 9 回目治療前の変化量を算出し、群間比較を行った。その結果、5 回目治療前から 9 回目治療前の変化量において深刺群の方が有意に良好であった。

【考察・結語】深刺群が良好であった理由として、大腿四頭筋への刺鍼が当該筋の筋緊張を低下させ、また、大腿神経近傍への刺鍼が、膝蓋靭帯や大腿四頭筋の血流に変化を与えた可能性を考えた。

頸部神経根症に対する鍼治療の臨床効果 —前向き症例集積研究—

今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】頸部神経根症による上肢症状に対する頸部傍脊柱部への鍼治療の臨床効果を検討した。

【方法】本症と診断された上肢痛・異常感覚を有する患者 15 名 16 肢を対象とした。障害高位を中心とした頸部傍脊柱部、最大 10 ヶ所を施術部位として、週 1 回の割合で計 4 回の鍼治療を行った（刺入深度：10～20mm、雀啄術）。各回の治療前と治療終了 1 ヶ月経過時に Visual Analogue Scale（VAS）を用いて症状の程度を確認し、治療前と 4 回の治療終了時および治療終了 1 ヶ月経過時には Neck Disability Index（NDI）と頸部神経根症治療成績判定基準を用いて QOL 評価を行った。

【結果】VAS の経時的変化パターンに関して、全てにおいて有意な変化を認めた（頸肩部痛： $p<0.0001$ 、上肢痛： $p<0.0001$ 、上肢異常感覚： $p<0.001$ ）。また、NDI、頸部神経根症治療成績判定基準何れにおいても同様に有意な変化を認めた（NDI： $p<0.0001$ 、頸部神経根症治療成績判定基準： $p<0.0001$ ）。治療前と 4 回目の治療前の比較において有意差を認めたことから治療の継続による効果が確認され（ $p<0.001$ ）、さらに、治療終了時と治療終了 1 ヶ月経過時の比較においては有意差を認めず、一定期間における治療の持続効果が確認された（ $p=0.52$ ）。

【考察】頸部傍脊柱部への鍼治療は頸椎疾患による上肢症状に対して継続効果、持続効果が期待できる有用な保存療法である可能性が示唆された。

肩こりに対する鍼の刺入深度の違いによる効果の相違 —ランダム化比較試験—

大崎 彩加, 今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】肩こりに対して、症状部位へ異なる刺入深度で刺鍼した際の治療効果についてランダム化比較試験により検討した。

【方法】慢性的な肩こりを有する患者 16 名を無作為に浅刺群（8 名）と深刺群（8 名）の 2 群に割り付けた。介入：両群ともに患者の症状自覚部位、最大 10 ヶ所とし、計 5 回（1 回／週）施行した。浅刺群は切皮のみ（約 5mm）、深刺群は 10～20mm 刺入し、何れも単刺術を行った。評価：肩こりの程度を Visual Analogue Scale（VAS）で記録し、Shoulder pain and disability index（SPADI）による QOL 評価を行った。また、施術の感覚と治療に対する満足度を聴取した。

【結果】VAS に関して、経時的変化パターン、治療直後効果および治療終了後の持続効果について深刺群で有意に良好な結果を示した（それぞれ $p=0.0214$, 0.0233 , $p=0.008$ ）。SPADI に関しては何れも群間に有意差を認めなかった。鍼の刺入感覚とひびき感については有と回答した者が深刺群で有意に多く（ $p=0.0014$, $p=0.0002$ ）、治療に対する満足度が高い傾向が見られた。

【考察】症状部位への刺鍼は、深刺が効果的である可能性が示唆され、鍼の刺入感覚やひびき感が治療効果に影響する可能性を考えた。

学生における VDT 機器の利用実態と 心身の自覚症状などに関するアンケート調査

鶴 浩幸¹⁾, 小糸 康治²⁾, 北小路 博司¹⁾

¹⁾ 明治国際医療大学鍼灸学部, ²⁾ 東京大学医学部附属病院リハビリテーション部

VDT（Visual Display Terminal）機器の進歩が著しい中、その利用は増加の一途をたどっている。労働者の VDT 作業による心身への影響については多数報告されているが、学生の VDT 機器の利用実態については不明な点が多い。そこで、本研究では大学生や専門学校生などを対象としたアンケート調査を行い、VDT 機器の利用目的や利用時間、自覚症状などとそれらの関係性について検討した。対象は鍼灸学部の大学生および鍼灸学科の専門学校生 294 名（平均年齢 24.5 歳）とし、平成 23 年 9 月 -24 年 1 月の期間にアンケート調査を行った。調査項目は、1. 視力や矯正の有無、2. VDT 機器の種類や利用目的、3. 利用時間、4. 自覚症状などとした。調査の結果、1 日当たりの利用時間は平均 3.6 時間であり、娯楽に費やす時間が最大であった。目では、目の疲れ（63.3%）・視力低下（37.8%）・目の乾き（37.4%）、目を除く身体症状は、頸肩こり（62.6%）・腰痛（34.7%）・全身の疲労感（31.0%）、精神症状は、ストレスを感じる（25.2%）・イライラしやすい（20.4%）の順で多かった。多重ロジスティック回帰分析により、女性は目の乾き・頸肩こりなどの発生リスクが高かった。また、目の症状には視力矯正が関係し、精神症状には利用時間が関係することなどが示唆された。本研究から得られた VDT 機器の利用時間や自覚症状の割合は、VDT 作業（労働者）に対する調査結果と類似しており、学生においても VDT 機器の利用によって、VDT 作業者とほぼ同等の心身への負担を受けている可能性が示唆された。

母指 CM 関節症に対する鍼治療

—1 症例報告—

岸本 優介, 今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

臨床鍼灸学専攻

【目的】母指 CM 関節症に対して、鍼治療を行い、症状の改善が得られたので報告する。

【症例】66 歳、女性。主訴：右母指基部の疼痛。現病歴：X-2 年頃、症状出現。右母指 CM 関節症と診断され、薬物療法と装具療法を開始。症状の改善が見られなかったため、X 年 9 月、再度受診、鍼治療を開始。現症：Grind test：右陽性。右のみ母指 MP 関節の伸展、CM 関節の尺側内転および橈側外転で疼痛を自覚。治療：長母指外転筋、長母指伸筋、短母指伸筋の起始部と母指 CM 関節の関節裂隙部 3 ヵ所に単刺術を施行した（計 10 回、1 回／1～2 週）。評価：毎回の鍼治療前後に疼痛の程度を Visual Analogue Scale（VAS）で記録し、Quick Disability of the Arm, Shoulder, and Hand questionnaire（Q-DASH）を用いて毎回の治療前に QOL 評価を行った。

【経過】VAS、Q-DASH とともに 6 診目までに漸減した。10 診時には Grind test 陰性となり、母指の可動による疼痛は何れも改善した。

【考察】薬物療法や装具療法が無効な母指 CM 関節症に対して、関節可動に関わる筋の起始部や疼痛部への鍼治療は有用な治療法である可能性を考えた。

頸部・手部の鍼刺激が自覚的耳鳴に与える影響の基礎的研究

鶴 浩幸, 福田 晋平, 江川 雅人

保健・老年鍼灸学講座

【目的】鍼治療が自覚的耳鳴を軽減させる場合があるが、科学的な概念やデータに基づく刺鍼部位の選択理由や効果については不明な点が多い。我々はこれまでに顔面部や頸部の自動運動や経穴などへの指頭による圧刺激、経皮的ツボ電気刺激（TEAS）などの体性感覚刺激が耳鳴に影響を与えること、大きさの軽減という点では自動運動より圧刺激や TEAS の方が効果的であることを見出した（JSPS 科研費 基盤研究 C24500840）。本研究では鍼刺激が耳鳴に与える影響について検討した。

【方法】対象はインフォームドコンセントの得られた健康成人ボランティア 15 名（平均年齢 25 歳）であり、静かな環境下で耳鳴を感じる者とした。被験者は耳栓とイヤーマフを装着後に環境音が 33 dB 以下の静かな部屋に入り、以下の介入による耳鳴の変化が検討された。1. 頸部（5 ヵ所）や手部（1 ヵ所）の経穴などに対する圧刺激を各 30-45 秒間行い、2. 耳鳴が変化した部位に対する鍼刺激を各 30-45 秒間行った。耳鳴は visual analogue scale（VAS）や標準耳鳴検査法 1993 における耳鳴の自覚的表現の問診票に基づいて作成した評価表により、大きさや持続などが聴取された。トランスデューサー指示計を用いて、どの程度の強さで圧迫した時に耳鳴が変化するかも検討した。【結果】前述 6 ヵ所に圧刺激（平均 1.39kgf）を行って耳鳴が変化した部位を確認後（13 例）、その部位に鍼刺激を行った結果、13 例中 12 例（92.3%）において、耳鳴の大きさの軽減（8 例）または消失（4 例）がみられた。鍼刺激により耳鳴が変化した場合には、大きさや持続の有意な減少が認められた。

【考察】鍼刺激により耳鳴が軽減、消失する場合のあることが示唆された。圧刺激を応用する方法により、耳鳴に有効な鍼刺激部位を簡便に検出できることが示唆された。【謝辞】本研究は JSPS 科研費 基盤研究 C 16K01780 の助成を受けたものである。

腰部脊柱管狭窄症に対する一般的鍼治療と 神経根鍼通電療法の併用効果

— 1 症例報告 —

久保 湧奨, 今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】腰部脊柱管狭窄症患者に対して、一般的鍼治療と、障害神経根鍼通電療法を併用し、良好な経過が得られたので報告する。

【症例】81 歳, 男性. 主訴: 右下肢痛・異常感覚, 間欠跛行. 現病歴: X 年 9 月, 急激な腰下肢痛を自覚し, 整形外科を受診. 腰部脊柱管狭窄症 (L4/5) と診断され, 安静・加療目的に入院. ブロック注射の効果なく, 鍼治療を開始. 現症: 右 L5 領域の知覚鈍麻 8/10. MMT: 右 TA, 右 EHL ともに 4. 連続歩行可能距離: 5m. 治療: 計 28 回. 一般的鍼治療を基本とし, 9, 13, 17, 22 診目はこれらに変えて, 神経根鍼通電療法を施行. 評価: 症状の程度を Visual Analogue Scale (VAS) にて記録し, Roland-Morris Disability Questionnaire (RDQ) と Pain Disability Assessment Scale (PDAS) により QOL 評価を行った.

【経過】9 診目の治療直後に症状の軽減が見られ, 22 診目までに漸減した. 神経根鍼通電を施行した 9, 13, 17, 22 診目においては明らかな直後効果を認めた. RDQ と PDAS は, 9 診目以降, 漸次改善した.

【考察】腰部脊柱管狭窄症に対して神経根鍼通電は有用性が高く, 一般的鍼治療との併用により高い効果を示す可能性が示唆された.

嗅覚減退に対する鍼治療の 1 症例

鶴 浩幸

保健・老年鍼灸学講座

風邪をひいた後に嗅覚の減退が持続した症例の鍼治療について報告する. 60 歳・女性, 1 ヶ月半前に風邪をひき, 嗅覚が消失した. 耳鼻科を受診したが診断名は告げられず, 薬物治療が行われたがあまり効果はなかった. 風邪が治っても嗅覚減退が回復せず, オーデコロンの臭いが少し分かる程度であり, 他の臭いは分からない. 投薬: ビタミン B₁₂ 製剤・アレルギー性鼻炎治療薬. 所見: 僧帽筋・肩甲挙筋・腰部脊柱起立筋に過緊張と圧痛あり. (東洋医学的所見) 舌診: 胖大・淡紅舌・薄白苔, 問診: 強い精神的ストレスがあり, 風邪をよくひく, 手足が冷える, 腰痛と不眠がある. 切診: 三陰交・孔最・合谷・風池に圧痛著明, 上星・列缺・肺俞に喜按, 脈診: 沈・緩, 臓腑弁証: 肺気虚弱. 鍼治療は直径 0.16mm の鍼を用い, 以下の経穴に約 4mm 刺入後に 10 分間の置鍼術を行った. 約 2 ヶ月の期間に計 6 回の治療を行った. 治療は①通竅: 上星・迎香・合谷・風池・肺俞・列欠, ②清頭目: 腦戸, ③腰部の筋緊張緩和・筋血流改善: 腎俞・大腸俞などに行った. 症状は VAS (visual analogue scale) にて評価し, 日常生活において, 0mm: 臭いを充分に感じる, 100mm: 臭いを全く感じない, とした. VAS は 90mm から 40mm へと改善し, 「様々な臭いを感じるようになった。」とのコメントが患者から得られた. VAS の改善や患者のコメントなどから, 本症例における嗅覚減退に対して鍼治療は有効であったことが示唆された.

効果的な看護技術演習の検討

小倉 之子

看護学部

【目的】看護専門学校1年生に対し全身清拭技術における技術評価を行い、学生の技術習得度の傾向を明らかにし効果的な演習内容を検討することを目的とした。

【方法】A 看護専門学校1年生36名に対し基礎看護援助論Ⅲのうち清潔援助における授業（寝衣交換、口腔ケア、洗髪、部分浴）を行い、全身清拭技術演習および技術チェックを実施した。その後、技術習得度を知るため独自の全身清拭技術チェック評価表を作成しそれをもとに評価を行った。倫理的配慮としてプライバシーの保護に厳守し対象者が特定できないよう配慮すること等の同意を得た。

【結果】全身清拭技術チェック合格率が100%の評価項目は「水分を十分にふき取ることができる」、[末梢から中枢へ向かって拭くことができる]、[上肢→頸部・胸部→腹部→後頸部→背部→腰部→臀部の順で拭ける]であった。合格ラインである60%を下回る評価項目は「室内環境を整えることができる」47%、[上肢は関節を支え背部は支えながら拭くことができる]28%、[拭き残し部分がなく拭くことができる]36%、[ボディメカニクスを活用できる]44%であった。学生の傾向として一連の順序で拭くことはできていたが、観察したことの報告を行う事や患者役を意識し配慮した実施が不十分であることが明らかになった。

リカレント学習講座「質的研究の基礎」の臨床研究支援 —臨床看護研究能力を高めるための内発的動機づけについて—

宇城 靖子¹⁾，仲口 路子²⁾

¹⁾ 看護学部成人・老年看護学講座，²⁾ 看護学部基礎看護学講座

【目的】本学看護学部で社会貢献の一環としてリカレント「看護研究の基礎」学習講座を2016年8月に2日間、開講した。「受講生が講座に参加して変化した内容」の聞き取り調査をもとに看護研究能力を高めるための内発的動機づけの変化について明らかにし、「臨床看護研究活動の困難内容」の文献検討とともに、今後の課題を明確化することを目的とした。【方法】同意の得られた受講生8名を対象に講座終了後、「講座に参加して変化したこと」について、30分間、グループインタビュー調査を行った。「変化したこと、変化しなかったこと」にわけ、7つにカテゴリー化し、内発的動機づけができたか検討を行った。さらに看護師が、看護研究活動の困難な内容、6件の文献検討を行い、「研究能力不足」項目の検討をした。倫理的配慮は大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。【結果】「変化した内容」検討では内発的動機づけ多く得られたと考えられた。「変化しなかった内容」に「倫理的配慮」「統計を学ぶ時間数不足」があった。文献検討では、講座に含まれていない「倫理的配慮」「研究テーマ絞り込み」「アイデア」「文章能力」があった。今後も動機づけが高められ、看護研究がなされるよう取り組みたい。

大学入学後の学修に対する適応要因に関する研究①

—適応の変化 1 年から 2 年生になって—

山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

【はじめに】昨年度, 新入生のリアリティショックについて調査した結果, 大学生活での不適応要因は勉強で, 学習ストレスを軽減するため援助の必要性が示唆された。対象が大学 2 年目となり, 同様のアンケート調査を行い大学での適応状況について明らかにしたいと考えた。【目的】本学看護学部の 2 年生 1 年間の成長を比較し, 大学生活への適応状態を明らかにする。【結果】看護学部 2 年生 58 名から回答を得た (1 年次は 68 名から回答)。1 年次より 10 名少なかったが, 『大学の勉強について』は, “学ぶ分量が多すぎる” “レポートが書けない” “内容が理解できない” という項目が増えていた。2 年次となり看護過程の展開など各領域の課題や, アセスメントなど知識を求められる内容に授業形式が変化し, 学修の困難感が増したことが要因かと推察する。『体調の変化』では, 1 年次よりも “不眠” “眠気” など全ての項目で減少していた。友人関係や通学など環境に適応できたことで体調面の安定につながったと考える。【結論】本学の 2 年生は 1 年次と比較すると, 体調・精神面では安定している。学修面では, 1 年次より 2 年次において “学ぶ分量が多すぎる” “レポートが書けない” “内容が理解できない” と学習に対する困難感を持つ学生が増えている現状がある。

看護系大学生の精神的健康パターンと 心理・ライフスタイルの関連性の研究

藤田 智恵子

看護学部

本研究では大学教育における教育指導の在り方を検討する基礎資料を作成することを目的とした。調査対象者は看護系大学学部生 3~4 年生 33 名。2016 年 2 月~3 月にかけて無記名自記式質問紙法調査を実施。精神健康については MHP. 1 (精神的健康パターン診断検査) を用いた。倫理的配慮としては, 所属大学の研究倫理委員会承認を得, 同意の得られた者のみを対象者とした。

対象者の平均年齢は 21.6 歳 (SD: ± 3.94), 男性 10 名, 女性 23 名。1 人暮らしの学生は 8 名 (24.2%) であった。睡眠は平均睡眠時間 5.9 時間であり, 睡眠状態は大変良い~普通 28 名 (84.8%), 悪い~大変悪い 5 名 (15.2%) であった。 χ^2 検定の結果, 睡眠良好群と不良群の男女比率には有意差は認められなかった。分析により以下の結果を得た。

1. ストレス不適応群の特性不安・状態不安得点は有意に高く, 自己価値観も低かったことから, 自信を持ち不安を解消できるような支援の必要性が示唆された。
2. QOL 平均得点を基にした 2 群間では, 低 QOL 群の疲労得点が有意に高く, 疲労感が残らないような日常生活環境の調整が課題と考えられた。
3. 同居者有り群の対人緊張得点が有意に高く, 学習機会を設けるなど今後の教育課題が残された。

大学入学後の学修に対する適応要因の研究② —看護学部 10 期生と 11 期生のアンケート結果の比較—

山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

【はじめに】昨年実施したリアリティショックに関する調査結果より、大学生活の不適応要因は勉強と友人であり、大学生活に適応できるように援助する必要があるとの示唆を得た。そこで、修学への適応要因は何かを明らかにするために 10 期生と 11 期生に対し昨年と同時期に同じ内容のアンケートを実施し比較した。【目的】昨年本学の看護学部生 10 期生に実施したアンケートを 11 期生にも同時期に実施し、結果を比較することで、学修に対する適応要因について明らかにする。【結果】昨年のアンケートは、10 期生 68 名、11 期生 59 名であった。2 学年とも殆どの項目で結果は酷似していた。『大学入学に伴う生活の変化』は“勉強時間”“交友関係”“携帯をする時間”で 2 極化していた。学年差が見られた項目は、『入学前の不安内容』『大学での過ごし方』『職業選択理由』『大学選択理由』『体調変化』『実習後の変化』『入学後の学修について』であった。学修では“勉強方法が分からない”は 2 学年の GPA の差でも結果が同様であった。【結論】2 学年の調査結果で明らかになったことは、大学入学後学修への適応要因は、『職業選択』と『大学選択』に関しての自己意識の差であると考えられる。